02–01010

「親指コミュニケーション」の彷徨
――「つながり感」に関する社会心理学的研究――

諸　井　克　英　　同志社女子大学 現代社会学部 教授

Ⅰ　問題

我が国では，既存の電話線を利用した高速インターネット・サービスの拡大が通信料を気にせずに「ネットする」人々を創出する大きな契機となったが，それよりもポケベルの一時的急増やその後の携帯電話機の飛躍的普及のほうがメディアに関わる顕在的現象となった。手軽に持ち運びでき，空間を超えて自在にコミュニケーションを営むことを可能にした「身体化されたメディア機器」の飛躍的普及が先行したのである（諸井，2000）。

「身体化されたメディア機器」の拡大・浸透は，もともとのインターネット装置の中に組み込まれた電子メールとは異なる流れ，すなわち「ポケベル→携帯メール」の流れに由来する。ポケベルから携帯電話機・PHS への移行は，当該メディアの潜在的伝達力を指すメディア・リッチネスの観点（Daft & Lengel, 1984）からは当然の移行といえる。ポケベルから携帯電話機への移行は，携帯電話機の値崩れが大きな契機となった。この移行の基底には，豊かなコミュニケーション・メディアへの志向性がある。ところが，携帯電話機にメール機能が装備されることにより，この解釈は単純には成立しなくなった。全国調査を見ると（毎日新聞，2001 a），携帯電話機所持が「携帯メール」利用によって動機づけられている。このことは，メディア・リッチネスの考えからは説明できない。つまり，文字コミュニケーションへの回帰が生じているのである。

この携帯電話機によるメール・コミュニケーションは，ポケベルによって引き起こされた「ベルフレ現象」の基底にある「未知者との出会い」と「つながり感」という要因を継承した「メル友現象」をもたらした。さらに，携帯電話機にインターネット機能が付加されることによって，インターネット系サイトの中で既に氾濫していた「出会い系サイト」（諸井，2000）が携帯電話機にも侵入し，種々の事件が引き起こされた（毎日新聞，2001 b）。

もはや携帯電話機は，従来の固定式電話機の延長線上に単純に位置づけることはできず，インターネット系の流れと合流した装置となった。携帯電話機は，固定電話機での「テレフォン・クラブ」（諸井，1996）や，インターネット系での「出会い系サイト」（諸井, 2000）に象徴される「親和欲求充足装置」としての側面を継承し，ポケベルのもつ「身体化されたメディア」という特徴をもつ，新たなメディア機器と化したのである。

Ⅱ　研究1

研究 1 では，携帯電話コミュニケーションがどのように認知されているかを探索した。その上で，日常の携帯電話行動の様態がこの認知とどのような関わりを示すかを検討した。対人関係を管理する基本的能力（対人有能性; 諸井・平井，2000）や，対人関係管理に伴う懸念（拒絶敏感性；Downey & Feldman, 1996）も，対人コミュニケーションとしての携帯電話コミュニケーションに関わると考えられるので，これらを含めた検討を行った。

1　方法

（1）調査対象および調査の実施

質問紙調査が，静岡県内の短大・大学で心理学関係の講義を受講している男女学生を対象として行われた。1 ～ 3 週間隔で 2 回の調査が行われ，343名（男子164名，女子179名）が共通の対象になった。

（2）質問紙の構成

2 回目の質問紙では，携帯電話機に関する利用状況に関する質問に加え，携帯電話の効用認知尺度から構成さ

れている。対同性-有能性尺度と拒絶敏感性尺度は，1回目の質問紙に含まれている。

①携帯電話の効用認知尺度: 携帯電話が日常生活の中でどのように役立っているかに関する自由記述調査に基づき，46項目尺度を作成した。被験者は，自分自身や他者が携帯電話でやりとりしている場面を思い浮かべながら，それぞれの項目が自分の考えや気持ちにどのくらいあてはまるかを4点尺度上で回答した（「かなりあてはまる〈4〉」～「ほとんどあてはまらない〈1〉」）。

②携帯電話の利用状況: 携帯電話機の所持状況を尋ね，所持者には，次の質問に回答させた。ここ1週間の利用頻度（発信・受信回数），受信有無への気がかりの程度（「かなり気になる〈4〉」～「まったく気にならない〈1〉」），通話中の相手の存在感覚（「すぐそばにいるような感じになる〈4〉」～「まったくそのような感じにならない〈1〉」）。

③対同性ー有能性尺度と拒絶敏感性尺度: 同性に対する対人技能を測定するために，Buhrmester *et al.*（1988）が作成した対人有能性尺度を用いた（諸井・平井（2000））。また，拒絶敏感性尺度（18項目; Downey & Feldman, 1996）の日本語版を作成した。それぞれの項目が表す状況を思い浮かべさせ，4点尺度で回答させた（「かなり不安になる」〈4〉～「ほとんど不安にならない」〈1〉）。

2 結果

（1）尺度の検討

男女別に以下の手順で3尺度の検討を行った。携帯電話の効用認知尺度では，尺度全項目に回答した男子141名，女子164名を対象とした。対同性-有能性尺度と拒絶敏感性尺度の場合，両尺度とも欠損値がない男子194名，女子220名の評定が分析された。因子分析（主因子法，プロマックス回転〈$k=3$〉）によって下位尺度項目を選定した。

①携帯電話の効用認知尺度: 男子では，男子は4因子解，女子は3因子解が解釈可能な因子構造を示した。そこで，因子構造の明確化のために曖昧な項目を除いて因子分析を反復し，明確な解を得た（男子: 親和性 α =.906; 束縛感 .857; 社会的体裁 .671; コミュニケーション中断 .630/女子: 親和性 α=.916; 束縛感 .851; コミュニケーション中断 .724）。

②対同性-有能性尺度: 男子ではコンフリクト処理に該当する項目のまとまりがみられなかった。そこで，男子ではコンフリクト処理項目を除き4因子解を求めた。因子構造の明確化のために再度分析を行った（開始 男子 α=.828, 女子.821; 否定的主張 .828,.841; 開示 .696, .731; 情動的支援 α=.816, .861; コンフリクト処理 女子 .706）。

③拒絶敏感性尺度: 予備的な因子分析では男女ともに解釈可能な因子が抽出されなかった。そこで，この尺度を単一次元尺度と見なした（男子: α=.829; 女子 .769）。

（2）携帯電話コミュニケーションに関する行動と認知の規定因

携帯電話の利用状況や利用に伴う認知が利用者の対人技能や携帯電話に対する態度によってどのように影響されているかを明らかにするために，一連の重回帰分析（ステップワイズ法）を試みた。過去1週間を範囲とする携帯電話の発信回数，受信回数，最長通話時間，受信懸念，存在感覚，それぞれを目的変数とし，対同性-有能性下位尺度得点，拒絶敏感性得点，携帯電話の効用認知下位尺度得点を説明変数とした。結果を**表1**に示す。

表１　携帯電話コミュニケーションに関する行動と認知の規定因：重回帰分析
（ステップワイズ法；投入基準 p 〈.05，除去基準 p〉.10）

	男子 (N=109)		女子 (N=129)	
〔発信回数〕	開始	.182 p=.056	拒絶敏感性	-.211 p=.014
	否定的主張	.229 p=.020	親和性	.225 p=.009
	親和性	.303 p=.001	R^2	.098 p=.001
	R^2	.173 p=.001		
〔受信回数〕	開始	.293 p=.001	親和性	.207 p=.019
	親和性	.246 p=.007	R^2	.043 p=.019
	R^2	.148 p=.001		
〔最長通話時間〕	開始	.221 p=.017	拒絶敏感性	-.212 p=.011
	親和性	.263 p=.005	親和性	.320 p=.001
	R^2	.119 p=.001	R^2	.152 p=.001
〔受信懸念〕	親和性	.364 p=.001	親和性	.264 p=.004
	束縛感	-.189 p=.033	中断	.227 p=.012
	中断	.215 p=.016	R^2	.087 p=.003
	R^2	.204 p=.001		
〔存在感覚〕	親和性	.526 p=.001	処理	.178 p=.015
	R^2	.276 p=.001	親和性	.553 p=.001
			R^2	.351 p=.001

標準化偏回帰係数
処理：コンフリクト処理；中断：コミュニケーション中断
発信回数，受信回数，最長通話時間は対数変換（log〈X+1〉）
説明変数：対同性-有能性，拒絶敏感性，携帯電話の効用認知

３　考察

男女ともに，「親和性」が携帯電話コミュニケーションの行動や認知の有意な規定因として現れた。これは，携帯電話機の飛躍的普及に親和欲求充足装置としての認知が基底にあるという，先述した考えを支持している。また，通話行動に対して，男子では「開始」有能性や「否定的主張」有能性が積極的役割を果たしているが，女子では「拒絶敏感性」の影響がみられる。これは，次のことを意味する。男子では関係形成の道具として携帯電話機が機能するのに，女子ではすでに形成された対人関係の維持装置として役立つ。つまり，いったん形成された関係にある重要な他者から拒絶の可能性を抱くときには，電話機自体の非対面性が不安を助長するので，非対面コミュニケーションは好まれない。研究1の結果は，とりわけ男子の側が「対人関係開拓装置」として携帯電話機を利用している可能性を示唆する。

受信懸念の規定因として「コミュニケーション中断」が現れたことは当然であるが，「束縛感」は男子でのみ有意な規定因であった。しかも，偏回帰係数の方向は，日常行動の束縛するという側面を認めると携帯電話機の受信が気にならないことを示している。女子の存在感覚で「コンフリクト処理」が有意な規定因であった。日常生活のいさかいの解決は本来は対面状況で行われるが，女子の場合には携帯電話コミュニケーションの中でもそのような解決がはかられると思われる。そのため，その技能が高い者はあたかも相手と対面していると感じる。Short *et al.*（1976）は，相互作用中の相手の顕在性の程度を社会的存在として定義し，各メディアの位置づけを試みた。本研究の結果は，興味深いことに，この位置づけが当該メディアに対する親和性評価によって規定されることを示している。

本研究は，携帯電話機の急速な普及に伴い「電話相談システム」への発信にもこのメディアが使用される可能性を前提として，日常生活の中での携帯電話コミュニケーションの心理的役割を検討した。予想通り，親和性（長田, 1971）が鍵となっていることが明らかになったといえよう。

Ⅲ　研究2

研究 2 では，携帯電話機を利用した 2 通りのコミュニケーション，つまり発話コミュニケーションとメール・コミュニケーションを扱った。前者は，すでに研究 1 で扱われた。先述した Daft らのモデルに従えば，メール・コミュニケーションは文字交換であるので，発話コミュニケーションに比べ，メディア・リッチネスに乏しいはずである。ところで，親和欲求が他者とのコミュニケーションを促進し，逆に，拒否の恐れである拒絶敏感性はコミュニケーションを抑制すると一般的に予測される。この予測があてはまる程度は，2 通りのコミュニケーションで異なるかもしれない。発話コミュニケーションは，メール・コミュニケーションに比べて，リッチネスの点で相対的に豊かな分，親和欲求を充足する程度が高いために，親和傾向の強い者が発信行動をとる傾向がより強く生じると思われる。しかし，メディア・リッチネスに乏しいコミュニケーション・モードのほうが，相手の拒絶反応を曖昧にできる。そのため，メール・コミュニケーションの場合には，拒絶敏感性と発信行動との関係が明確になると推測できる。

研究 2 の目的は，携帯電話機による 2 通りのコミュニケーションの基底にある心理的メカニズムを親和性と拒絶敏感性という観点から明らかにすることである。なお，調査対象を女子大学生に限定したが，次の理由による。男女学生を対象とした研究 1 では，女子のほうで，①携帯電話機でのコミュニケーション相手の「存在感覚」を強く抱く，②携帯電話機の番号を特定の者にしか教えない，などの特徴的傾向が見られた。女子青年は，「親和的意図モード」を自己呈示方略として用いるために，対人関係志向的になる（Deaux, 1977）。そのため，コミュニケーション・メディアの親和化をはかる傾向が女子青年では顕著であると思われる。ポケベルが親和欲求充足道具として役立つことを認知させたのも女子中・高生であった（日本青少年研究所, 1997）。

1　方法

（1）調査対象および調査の実施

質問紙調査が，DW 大学の社会心理学関係の講義内に匿名形式で行われ，以下に記す 2 尺度に完全回答した305名の女子学生を分析対象とした。

（2）質問紙の構成

①親和性尺度:　本研究では，親和性を「他の人々と一緒にいようとする欲求」（長田, 1971）と定義した。この親和性を測るために，前原（1979）による尺度を参考にして，16項目から成る尺度を作成した。まわりの人（同性・異性に関係なく）との日ごろの様子を思い浮かべてもらい，それぞれの項目で述べられていることが回答者自身にどのくらいあてはまるかを 4 点尺度で評定させた（「かなりあてはまる」〈4点〉～「ほとんどあてはまらない」〈1点〉）。

②拒絶敏感性尺度:　研究 1 と同じ尺度を用いた。

③携帯電話機の利用状況:　a）発話コミュニケーション:　ここ 1 週間の「通話」利用頻度（発信回数，受信回数，最も長かった通話時間），ここ 1 週間の「通話」メッセージ内容の重要度（「ほとんどが重要な話〈4〉」～「ほとんどが重要でない話〈1〉」），「通話」受信有無への気がかりの程度（受信懸念:「かなり気になる〈4〉」～「まったく気にならない〈1〉」）。

b）メール・コミュニケーション:　携帯メールの利用状況についても a）と同様な側面を測定した。

2　結果

（1）尺度の検討

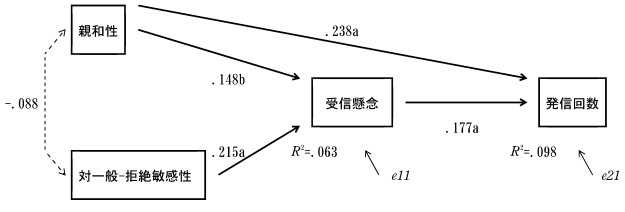
①親和性尺度:　因子分析による事前分析では適切な因子解を得ることができなかった。そこで，親和性尺度を単一次元尺度として検討した。尺度項目の未回転第Ⅰ主成分負荷量やピアソン相関値をチェックしながら分析を反復した。12項目が.250の値を上回り，α 係数値も .764 とまずまずであり，これら12項目の平均値を親和性得点とした。12項目が単一因子によって反映されていると仮定して，確認的因子分析（*Amos*4.0; Arbuckle & Wothke, 1999）を行い，適合度を確認した（*GFI*=.914, *AGFI*=.875）。

②拒絶敏感性尺度: 因子分析（主因子法，プロマックス回転〈$k=3$〉）によって因子構造を探索し，解釈可能な2因子解を得た。第Ⅰ因子は「対異性-拒絶敏感性」，第Ⅱ因子は「対一般-拒絶敏感性」と命名した。負荷量|.400|を基準として下位尺度項目とした（それぞれ，α=.769；.691）。次に，これらの2因子に対応した確認的因子分析を行った（*GFI*=.944, *AGFI*=.918）。

（2）携帯電話コミュニケーションに関する行動と認知の規定因

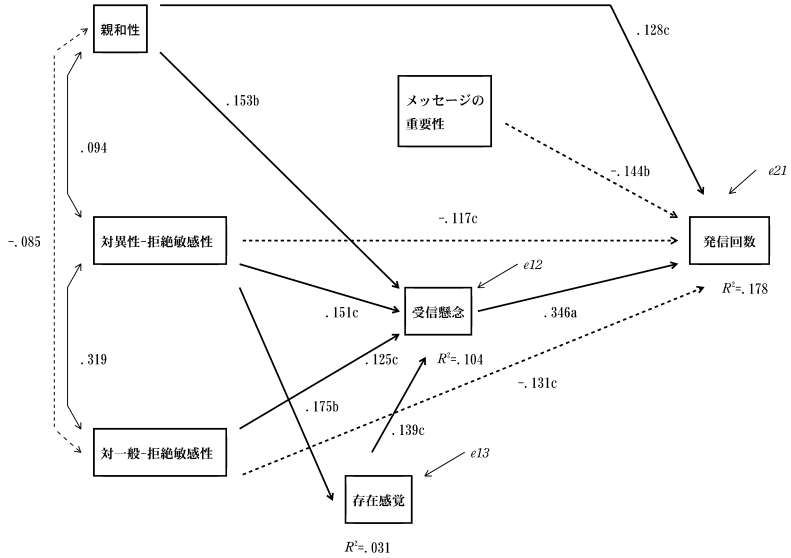
携帯電話の利用行動が利用者の個人的傾性（親和性や拒絶敏感性）や携帯電話利用に伴う態度にどのように影響されているかを明らかにするために，観測変数の構造方程式（*Amos* 4.0）による因果分析を試みた。「個人的傾性（親和性，対異性-拒絶敏感性，対一般-拒絶敏感性）→コミュニケーションに伴う意識→発信への動機づけ（発信回数）」という枠組みを設定した。有意水準を満たさないパスのうち最も小さい標準化係数のパスを除外して，計算を再実行した。適合度の高さを確認しながら，この手順を反復した。

発話コミュニケーションに関して，最終的に得られた結果を**図1-a**に示す。メール・コミュニケーションの分析でも良好な結果を得た（*GFI*=.987, *AGFI*=.961）。しかし，受信懸念と存在感覚の相関値の高さを考慮して（r=.194）存在感覚から受信懸念に向かうパスを追加したところ，適合度の増加が見られたので，最終的には**図1-b**に表す解を採用した。



N=301
矢印：標準化パス係数〈a:*p*<.001；b:*p*<.01〉　*e11*～*e21*：誤差項
〔モデル適合度〕 $\chi^2_{(1)}$=0.453, *p*=.501, *GFI*=.999, *AGFI*=.992, *RMR*=.004

図1-a　発話コミュニケーション行動の規定因―観測変数の構造方程式（Amos 4.0，最尤推定法）による因果分析―



N=291
矢印：標準化パス係数〈a:*p*<.001；b:*p*<.01；c:*p*<.05〉　*e11*～*e21*：誤差項
〔モデル適合度〕 $\chi^2_{(3)}$=6.964, *p*=.541, *GFI*=.993, *AGFI*=.976, *RMR*=.015

図2-a　メール・コミュニケーション行動の規定因―観測変数の構造方程式（Amos 4.0，最尤推定法）による因果分析―

3 考察

平均的には，発話コミュニケーションはほぼ1日1回，メール・コミュニケーションはほぼ1日10回弱営まれていた。重要な話は発話コミュニケーションによるという傾向も認められた。これらは，通信コスト上の差異を反映しているが，本研究の他の結果は通信コストにのみ依存して選択が行われているわけではないことを示した。

通信コストの差異は，メール・コミュニケーションの場合に受信懸念が相対的に高いことを説明できない。メール・コミュニケーションは，発話コミュニケーションに比べ，メディア・リッチネスに乏しいために，重要な会話には向かない。しかし，携帯電話機に装備されたメールは，ポケベルと同様にメディア・リッチネスに乏しい分だけ，「つながり」の道具として心理的に機能していると考えられる。単に通信コストの差異によって2つのコミュニケーションが弁別的に営まれているわけではないのである。このことは，発信回数を指標とした分析でより明確にされた。

親和性は2つのコミュニケーションいずれの場合にも有意な規定因であったが，拒絶敏感性はメール・コミュニケーションでのみ有意であった。親和性が発信行動におよぼす影響の大きさは，予想通り発話コミュニケーションのほうが大きかった。

しかし，メールの発信行動に対する拒絶敏感性の直接的影響の方向は，予想と逆で負であった。拒絶を予期するほどメール発信回数が少なくなるのである。これは，受信懸念を媒介させた間接的影響を見ると理解できる。拒絶敏感性が受信懸念を高め，その受信懸念が発信回数を高めるのである。つまり，「拒絶敏感性→受信懸念→発信回数」のパスで考えると，予想された拒絶敏感性の働きが現れている。

この受信懸念に対する親和性の影響は，2つのコミュニケーションともに認められているが，この限りでは，「他の人々と一緒にいようとする欲求」は身体化されたメディア機器による「つながり」を絶えず気にする傾向をもたらすといえる。しかし，「重要な他者からの拒絶」を怖れることは，2つのコミュニケーションそれぞれで異なる影響をもたらした。一般的に他者からの拒絶に敏感になる傾向は，いずれのコミュニケーションでも「受信懸念」を高めるが，「異性からの拒絶」の怖れはメール・コミュニケーションの場合でのみ影響を示した。これは，携帯電話機の発話機能に比べ，相対的にメール機能が異性との相互作用のために利用されることを示唆している。

本研究で得られた「異性からの拒絶を予想→メール着信が気になる→メール発信の活性化」のパスは，女子の場合に限定されるが，携帯電話機の「出会い系サイト」の問題を理解するのに役立つ。メール・コミュニケーションの活性化された営みは，いったん「つながり」が形成された「異性」に対する「切断の怖れ」が結局のところ絶え間ないメール発信を促進することによっている。しかし，メディア・リッチネスに乏しいために，ひんぱんなメール交換のわりに相互の情報は表面的なままであり，「つながり感」だけが蓄積されやすい。そのため，「出会い系サイト」をきっかけとした出会いは，現実に出会ったときの「落差感」を増大させる。これは，「ベルフレ」の構図にも似ており（諸井, 2000），異性との出会いによる対人技能の醸成をもたらさない。

携帯電話機の発話コミュニケーションを対象とした研究1では，女子の場合にのみ発信回数が拒絶敏感性と負の関係を示した。拒絶敏感性が強いほど，携帯電話機の通話をしようとしないのである。研究1では単一次元性概念として拒絶敏感性を扱っているために，研究2との比較には注意が必要であるが，次のように解釈できよう。直接的な影響関係は「拒絶敏感性が高いほど発信を控える」ことを意味する負の関係であり，受信懸念を媒介とする間接的関係では「拒絶敏感性が高いほど発信行動を動機づける」ことを示す正の関係にある。受信懸念を媒介させなかった研究1では，後者の関係が顕在化したといえる。

研究2では，Downey & Feldman（1996）が提起した拒絶敏感性について，研究1と異なり，「対異性－拒絶敏感性」と「対一般－拒絶敏感性」の2因子が得られた。この分離は，我が国でも研究対象とされるようになった「異性不安」概念に関連する。青年にとって，同性との同輩関係の形成・維持に加え，異性の友だちや恋人の獲得が日常生活における重要な目標の1つとなると，獲得の失敗やその懸念が臨床的問題を引き起こす可能性もある。

また，発信行動に対する親和性と拒絶敏感性の弁別的特徴が見出された。ここで用いた親和性尺度では，項目の中で対象の性別は曖昧に表現されている。拒絶敏感性尺度のほうは，もともと対異性項目が多く含まれていたので，結果として「対異性」に関する意識が抽出されたのかもしれない。今後，拒絶敏感性尺度を改良することによって本研究で得られた拒絶敏感性2次元を再検討するとともに，相互作用対象の性別を考慮した親和性の測

定を試みるべきであろう。Mehrabian & Ksionzky（1974）は，親和性モデルを提起する際，他者を正，負の強化源泉として知覚するかに関する2つの個人差変数を基軸にした。しかし，Downey & Feldman による拒絶敏感性概念は，親和性理論よりも愛着理論の伝統に沿って提起された。親和性と拒絶敏感性の概念的関係を今後整理する必要がある。

Ⅳ　引用文献

Arbuckle, J.L., & Wothke, W. 1999 *Amos 4.0 user's guide.* Chicago: SmallWaters Corporation.

Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M.T., & Reis, H.T. 1988 Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 991-1008.

Daft, R. L., & Lengel, R.H. 1984 Information richness: A new approach to managerial behavior and organization design. *Research in Organizational Behavior*, **6**, 191-233.

Deaux, K. 1977 Sex differences. In T. Blass (Ed.), *Personality variables in social behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. pp.357-377.

Downey, G., & Feldman, S.I. 1996 Implications of rejection sensitivity for intimate relationshiops. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.

毎日新聞　2001 a　第47回学校読書調査　2001年10月26日朝刊

毎日新聞　2001 b「出会い系」犯罪急増　2001年11月 1 日朝刊

前原武子　1979 達成傾向および親和傾向の測定―Mehrabianの質問紙―琉球大学教育学部紀要第 2 部, **23**, Pp.255-262.

Mehrabian, A., & Ksionzky, S. 1974 *A theory of affiliation*. London: D.C.Heath and Company.

諸井克英　1996 電話コミュニケーションと対人関係　川浦康至他（共著）『メディアサイコロジー―メディア時代の心理学―』富士通ブックス pp.157-190.

諸井克英　2000 情報通信の病理: 親和コミュニケーションの彷徨　廣井脩・船津衛（編）『情報通信と社会心理』北樹出版 pp.155-172.

諸井克英・平井加苗　2000 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究―表面的関係志向性と対人有能性との関連を中心として―人文論集（静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告），**50**(2), 35-62.

長田雅喜　1971 社会的なモティベーション―親和性を中心にして―水原泰介（編）『講座心理学 13 社会心理』東京大学出版会 pp.34-57.

Short, J., Williams, E., & Christie, B. 1976 *The social psychology of telecommunications*. London: John Wiley & Sons.